箱　崎 12

－箱崎遺跡群第17次・第23次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第704集

2002

福岡市教育委員会

序　文

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

今回報告する箱崎遺跡群第17・23次調査においても発掘調査により多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで地権者である株式会社林衛材、上丸彦一郎様をはじめとする関係各位のご理解を賜り、ご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

平成14年３月29日

福岡市教育委員会

教育長　生　田　征　生

例　言

1．本書は福岡市教育委員会が平成10年度に東区箱崎１丁目20－19において実施した箱崎遺跡群第17次調査及び平成12年度に東区箱崎３丁目2404番地において実施した箱崎遺跡群第23次調査の発掘調査報告書である。

2．遺構の実測は長家伸が行った。

3．遺物の実測は長家、林田憲二、井上加代子、小田裕樹が行った。

4．製図は長家、林田、坂本真一、小田が行った。

5．写真は長家が撮影した。

6．本書で用いる方位は磁北であり、座標北から6°西偏し、真北から6°18′西偏する。

7．本書で用いる遺構番号は各調査で通し番号にし（一部欠番あり）、報告の際には遺構の性格を示す略号を付して表記している。略号は土坑（SK）、溝（SD）、井戸（SE）、ピット（SP）不明遺構（SX）である。

8．出土遺物番号は各調査ごとに１からの通し番号としている。

9．本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので、活用いただきたい。

10．本書の編集・執筆は長家が行ったが、各調査毎の出土動物遺存体については屋山洋が執筆した。

第17次調査

遺跡調査番号	９８６４		遺跡略号	HKZ-17	
所在地	東区箱崎１丁目20－19		分布地図番号	34－2639	
開発面積	206㎡	調査対象面積	206㎡	調査面積	40㎡
調査期間	平成11年３月８日～平成11年３月31日		事前審査番号	10－２－380	

第23次調査

遺跡調査番号	００４１		遺跡略号	HKZ-23	
所在地	東区箱崎３丁目2104番地		分布地図番号	34－2639	
開発面積	381㎡	調査対象面積	304㎡	調査面積	188㎡
調査期間	平成12年９月22日～平成12年11月２日		事前審査番号	12－２－028	

箱崎遺跡群第17次調査

本文目次

Ⅰ　はじめに……2
　1　調査にいたる経過……2
　2　調査体制……2
Ⅱ　調査の記録……2
　1　調査概要……2
　2　遺構と遺物……8
　　1）溝……8
　　2）土坑……14
　　3）その他の遺物……20
　　4）小結……20
　付編　参考資料：箱崎19次出土動物遺存体（屋山）……20

挿図目次

第1図　調査区位置図1（1/25000）……3
第2図　調査区位置図2（1/5000）……4
第3図　調査区位置図3（1/500）……5
第4図　調査区全体図及び東壁上層図（1/80）……6
第5図　SD05出土遺物実測図1（1/3）……9
第6図　SD05出土遺物実測図2（1/3）……10
第7図　SD05出土遺物実測図3（1/3）……11
第8図　SD05出土遺物実測図4（1/3）……12
第9図　SD11出土遺物実測図（1/3）……14
第10図　SK02・03・06実測図（1/30）……15
第11図　SK03・06出土遺物実測図（1/3）……16
第12図　SK07・08・12・13・14・19実測図（1/30）……17
第13図　SK07・08・12・13・14・19及びその他の出土遺物実測図（1/3）……18

写真目次

写真1　調査区全景（北から）……1
写真2　調査区東壁土層1（南西から）……7
写真3　調査区東壁土層2（北から）……7
写真4　SD05（東から）……8
写真5　SD05土層……8
写真6　SD11（東から）……13
写真7　SD11土層……13
写真8　SK02（南西から）……15
写真9　SK03（西から）……15
写真10　SK06・07・08（西から）……17
写真11　SK07・08（西から）……17

箱崎遺跡群第23次調査

本文目次

Ⅰ　はじめに……22
　1　調査にいたる経過……22
　2　調査体制……22
Ⅱ　調査の記録……22
　1　調査の経過……22
　2　遺構と遺物……30
　　1）井戸……30
　　2）溝……34
　　3）土坑……34
　　4）不明遺構……48
　　5）小結……48
　付編　箱崎23次出土動物遺存体（屋山）……49

挿図目次

第1図　調査区位置図（1/500）……21
第2図　調査区全体図（1/100）……23・24
第3図　南壁土層図（1/60）……25
第4図　SE01実測図（1/30）……26
第5図　SE01出土遺物実測図（1/3）……27
第6図　SE01出土板碑1（1/10）……28
第7図　SE01出土板碑2（1/10）……29
第8図　SE13・14実測図（1/30）……30
第9図　SE13出土遺物実測図（1/3）……31
第10図　SE26実測図（1/30）……32
第11図　SE26出土遺物実測図（1/3）……33
第12図　SD12及び出土遺物実測図（1/30、1/3）……34
第13図　SK07・09・11及び09出土遺物実測図
　（1/30、1/3）……35
第14図　SK15・16・19・20・21・22実測図（1/30）……37
第15図　SK15・16出土遺物実測図（1/3）……38
第16図　SK19・20・21・22出土遺物実測図（1/3）……39
第17図　SK23・24・27・28・29・30実測図
　（1/40、1/30）……41
第18図　SK23・27出土遺物実測図（1/3）……42
第19図　SK28・29出土遺物実測図（1/3）……43
第20図　SK30出土遺物実測図（1/3）……44
第21図　SX05実測図（1/50、1/30）……45
第22図　SX05出土遺物実測図1（1/3）……46
第23図　SX05出土遺物実測図2（1/3）……47

写真目次

写真1　調査区東半全景（東から）……23
写真2　調査区西半全景（西から）……24
写真3　南壁土層……25
写真4　SE01（西から）……26
写真5　SE01石組み（西から）……26
写真6　SE26（東から）……32
写真7　SE26土層……32
写真8　SK09（西から）……36
写真9　A－B－D土層……36
写真10　SK27（南から）……40
写真11　SK29土層……40
写真12　SX05（北から）……45
写真13　SX05内石組み（北から）……45

箱崎遺跡群第17次調査

写真1　調査区全景（北から）

Ⅰ はじめに

1　調査にいたる経過

平成10年10月28日付けで株式会社林衛材 代表取締役福永通司氏より福岡市教育委員会宛に福岡市東区箱崎１丁目20−19の物件に関して、社屋建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号10−２−380）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡群（分布地図番号34−2639・遺跡略号HKZ）に含まれているところである。申請地内には既設建物が存在し試掘調査は不可能であったが、申請地から西側30ｍほどの地点（箱崎遺跡群第18次調査地点）ですでに試掘調査により遺構の存在が確認されており本地点でも同様の状況が想定できるため、埋蔵文化財課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取り扱いについて協議を行った。協議の結果社屋建設による遺構の破壊が避けられないため、発掘調査を行い記録保存を図ることで協議が成立した。整理の一部と報告書作成は平成13年度に繰り越している。

調査期間は平成11年３月８日～平成11年３月31日である（調査番号9864）。発掘調査は申請地の206㎡を対象としたが、作業場の安全確保のため実際の調査面積は40㎡となっている。遺物はコンテナ４箱分出土している。

現地での発掘調査にあたっては株式会社林衛材および関係の皆様から発掘調査についてご理解を得るとともに多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

2　調査体制

事業主体　株式会社 林衛材
調査主体　福岡市教育委員会埋蔵文化財課
調査総括　埋蔵文課財課長　山崎純男
　　調査第２係長　力武卓治
調査庶務　文化財整備課　谷口真由美（前任）　御手洗清（現任）
調査担当　調査第２係　長家伸

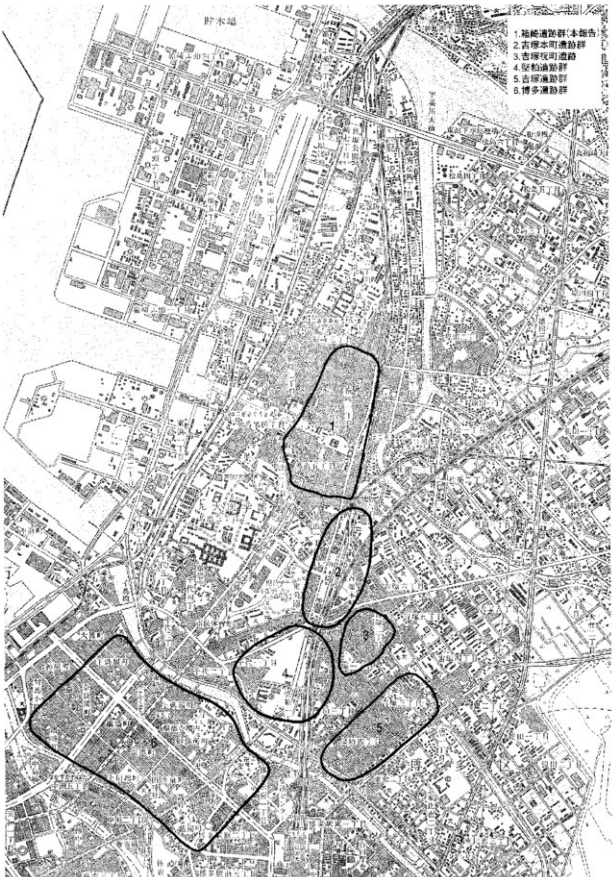
なお調査・整理作業に従事された方々にも、厚くお礼申し上げたい。

Ⅱ 調 査 の 記 録

1　調査の概要

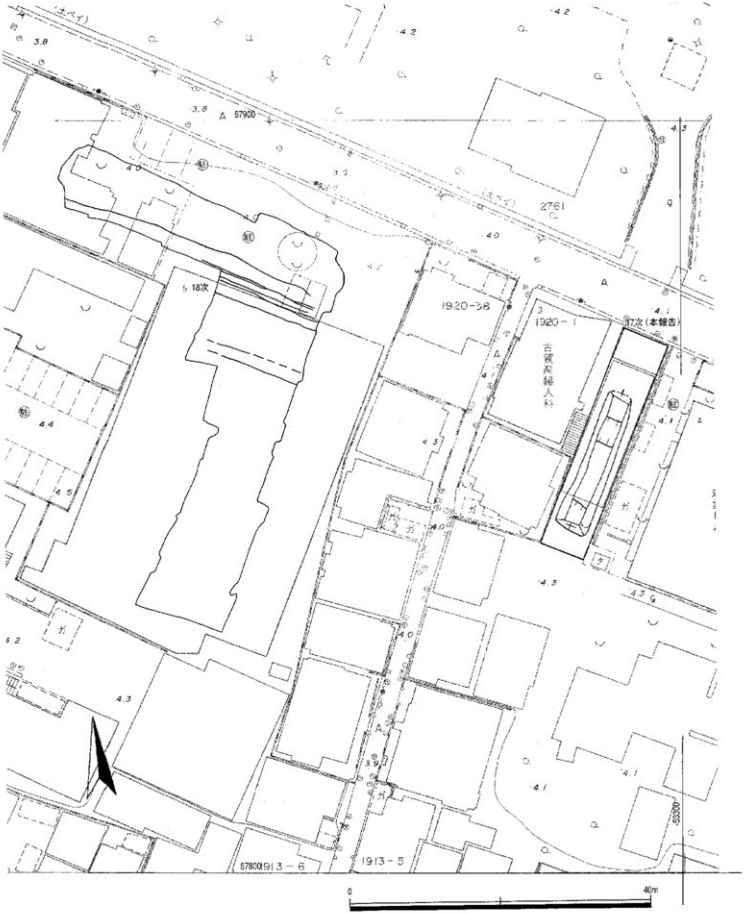
調査は既存建物解体終了後に着手した。前章でも述べたとおり申請地が狭長であるため上面で安全上の引きを取り、掘削も崩落防止の勾配をとったため法下での調査区形状は幅約２ｍ、長さ18ｍのトレンチ状となっている。表土除去は重機によって行った。明瞭な遺構面が確認できなかったため地山である黄褐色風成砂上面（標高3.1～3.3ｍ）で遺構検出を行なった。調査区内では砂丘面がわずかに南西側に傾斜している。

調査区内の基本層序は地山（黄褐色砂）上面に淡黒色砂（38層）、焼土を多く含む暗褐色砂質土（４層）、明黄褐色砂質土（３層）、表土（１層）が堆積している。土層観察からは本来大半の遺構は16層上面から掘り込まれていることが確認できた。38層からは瓦、糸切り土師器小皿等が出土しており、おおよそ中世前半期の堆積層と考えられる。また４層による整地が行なわれたのは、近世以降と

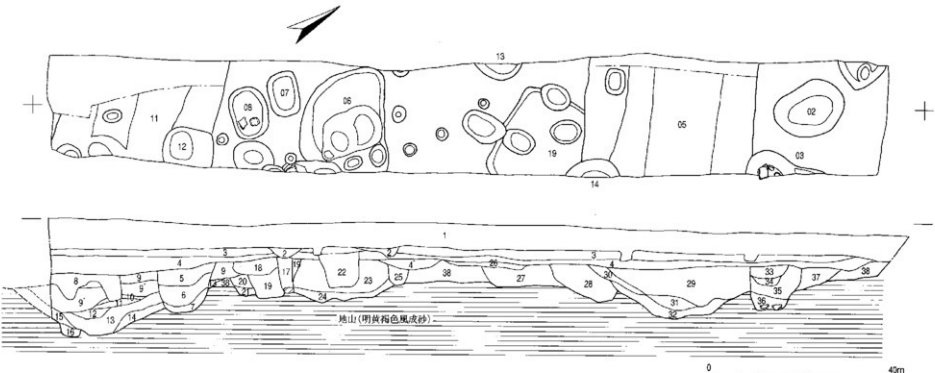


第1図　調査区位置図1（1/25000）

第２図　調査区位置図２（1/5000）



第3図　調査区位置図3（1/500）



1.表土
2.灰褐色十
3.明黄褐色砂質土
4.地土を多く含む暗褐色砂質十
4'.4層と褐色砂混合
5.明黄褐色砂
6.暗褐色砂(やや土壌化) } 5—7層SK12
7.淡黒色砂
8.灰褐色十
9.オリーブ褐色砂
9'.9層にラミナ入る
10.淡黒色砂
11.にぶい黄褐色砂
12.暗灰黄色砂(炭化物含む)
13.暗灰黄色砂
14.灰黄色砂
15.黒褐色砂
16.淡黒色砂
17.白色粘土ブロックを含んだ暗褐色砂
18.灰褐色砂質十に焼十を含む } 9'～15層SD11
19.黒褐色砂と黄褐色砂混合
20.淡黒色砂
21.20層に黄褐色砂混合
22.焼土と暗褐色土混合
23.灰味を帯びた暗褐色砂
24.暗黄褐色砂
25.黒色砂 } 23・24層SK06
26.明黄色砂
27.淡黒色砂 —SK19
28.黒褐色砂 —SK14
29.暗褐色砂
30.黄褐色砂
31.黒褐色砂 } 29～32層SD05
32.褐色砂
33.褐色砂
34.灰白色砂質土(焼土・粘土を含む)
35.暗褐色砂
36.暗黄褐色砂 } 33～36層SK03
37.淡黒色砂
38.淡黒色砂(地山直上の包含層)

第4図　調査区全体図及び東壁土層図(1/80)

写真２　調査区東壁土層１（南西から）

写真３　調査区東壁土層２（北から）

考えられるが詳細は明らかでない。検出遺構はいずれも中世前半以降に位置付けられる溝、土坑、ピットである。遺物量は少なく良好な資料と言い難いが、出土遺物のおおまかな傾向としては土師器の坏、小皿破片が出土遺物の主体を占め、底部の調整にはヘラ切りと糸切りが混在する。また陶磁器類は僅少である。SD05からは瓦がまとまって出土している。

2　遺構と遺物

1）溝（SD）

ＳＤ０５（第４図）

調査区北側で検出する。調査区にほぼ直交する。SK14→SD05→SK03の関係となる。検出面での幅3.6m、深さ90cmを測る。断面形状は略逆台形を呈する。溝が直進するとすれば第18次調査のSD048～050に対応する可能性が高いと考えられ、その際の延伸方位は現在の道路にほぼ並行して延びるものと考えられる。本調査区では18次調査で見られたような掘りなおしの痕跡は確認できていない。遺物は29～31層を上層、32層を下層として取り上げを行う（第４図参照）。遺物はコンテナ３箱出土しており、陶磁器、土師器、瓦、滑石製品、土製品、鉄釘等が出土する。特に瓦の出土量が多い。出土遺物及び18次調査成果から15世紀後半～16世紀前半代に位置付けられる。

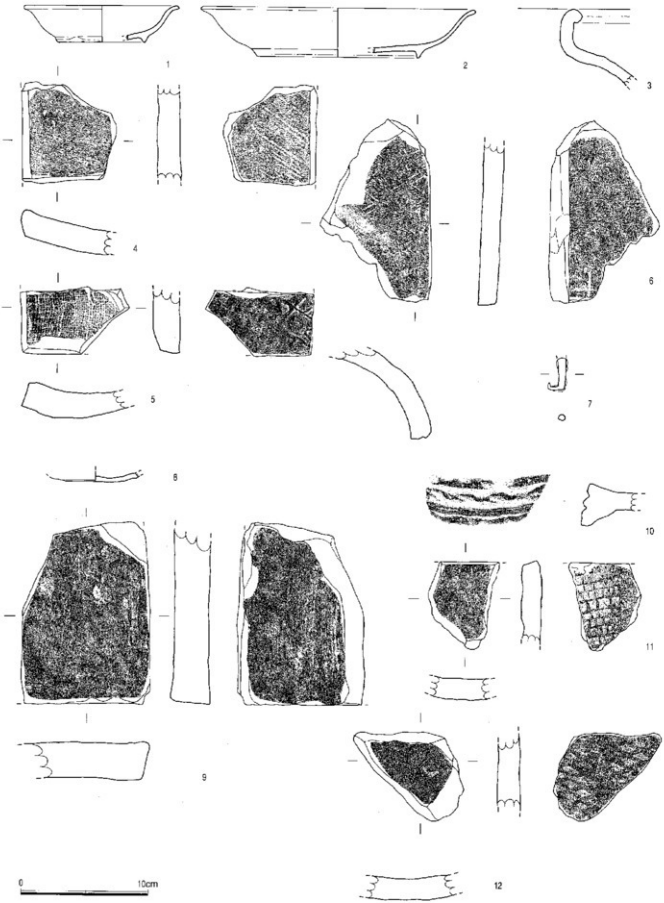
出土遺物（第５～８図）　１～７上面、８～22は上層（第４図　29～31層）、23～31は下層（第４図　32層）、32～46は当初設定したトレンチからの出土である。

１・２は白磁碗である。いずれも高台畳付きが露胎となる。３は陶器の甕口縁部である。端部は丸く外側に張り出している。４・５は平瓦である。４は凹面横方向のナデ、凸面は側縁部から斜め方向のナデを行なう。５は焼成須恵質である。凹面には布目が残り、凸面は斜格子のたたきを行なった後にナデ消している。６は須恵質の丸瓦である。凹面は布目の上から縦方向のナデを行なう。凸面は斜格子目の叩きを粗くナデ消している。７は鉄釘である。先がコ字状に折れ曲がる。

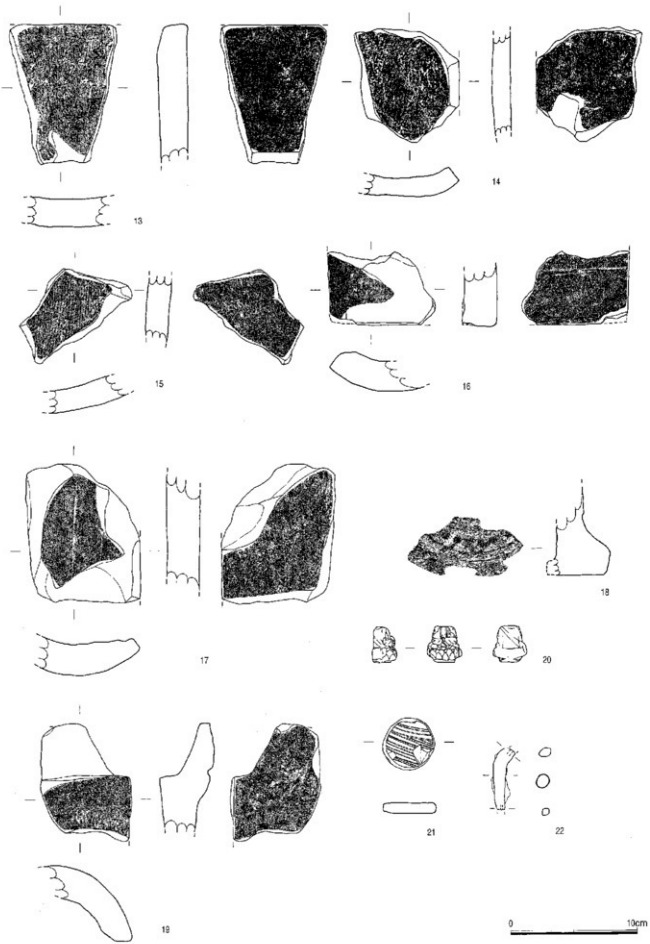
８は土師器皿である。外底面はヘラ切りを行なう。内底面にナデは行なわれていない。９は瓦質の埦である。端面はヘラ状工具で切り落とし、平面はナデを行なう。10は押圧文の軒平瓦である。中段の波状文は工具を刺突して整形している。また最下段の押圧もあまくなっている。11～17は平瓦である。11は凹面布目、凸面格子目が残る。12は凹面ナデ、凸面斜格子の叩きを行なう。13～17は凸面はいずれもナデを行なう。凹面は13がナデ、14には粗い布目、15～17には細かい布目が残る。18は玉縁式の軒丸瓦である。胴部凸面は縄目の叩きを行った後ナデており、凹面には布目が残る。19は軒丸瓦

写真４　SD05（東から）

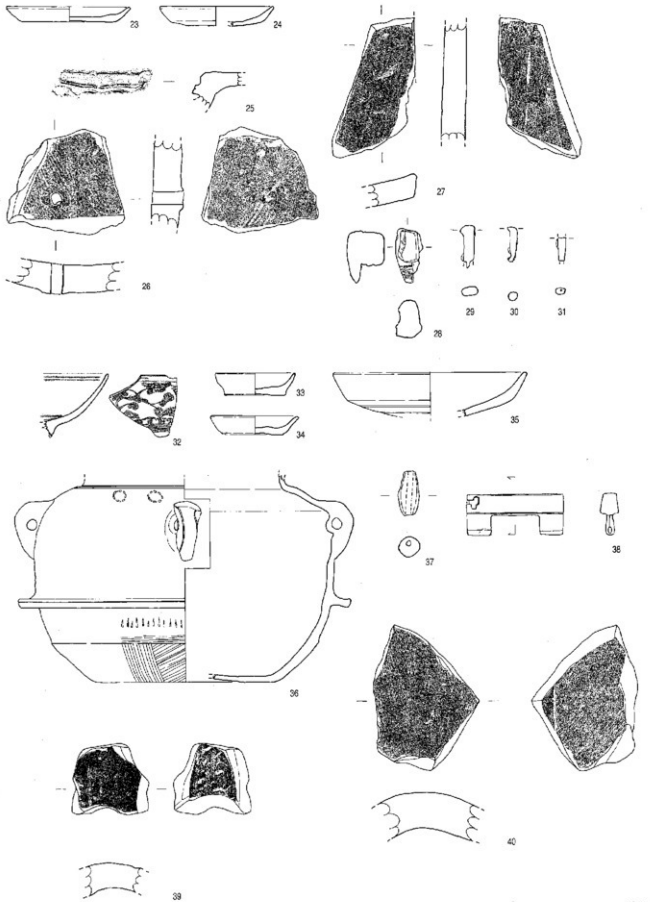
写真５　SD05土層



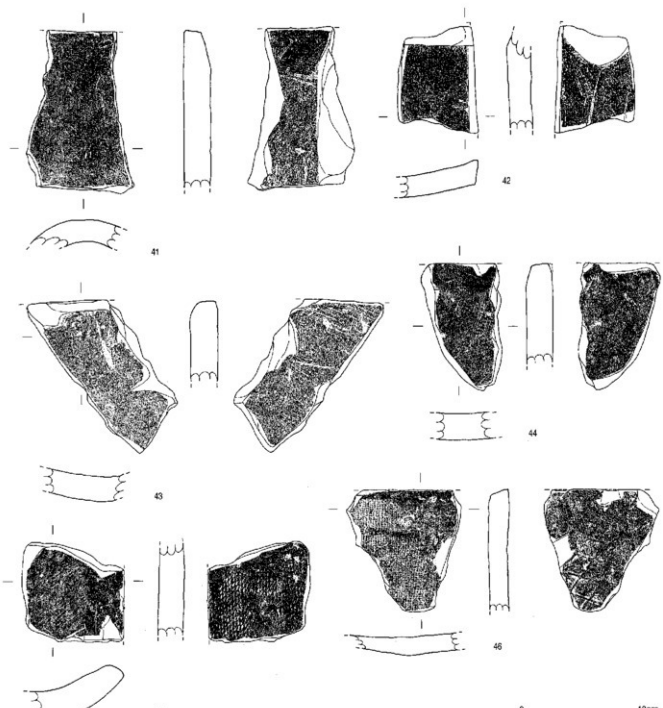
第５図　SD05出土遺物実測図１（1/3）



第6図　SD05出土遺物実測図2（1/3）



第７図　SD05出土遺物実測図３（1/3）



第8図　SD05出土遺物実測図4（1/3）

の瓦当部分で、外区に珠文が配され、内区には巴文の尾部がわずかに残る。20は土師質の型作りの仏像である。21は土師器皿の底部を円形に剥取った土製品で、破面には粗い磨きが行なわれる。22は鉄釘である。錆により大きく膨らんでいる。両端部は欠失しているが、上端部分は「く」字状に折れ曲がる。

23・24は土師器皿である。共に外底面はヘラ切りを行なう。25は押圧文の軒平瓦である。26・27は平瓦である。26は凹凸両面に刷毛状の痕跡が残る。また焼成前に穿孔が行なわれるが、焼成時の溶着により、孔は塞がっている。27は凹凸両面ナデを行い、凹面及び側面は燻している。28は滑石製品で

ある。把手の部分に穿孔が行なわれており、この部分には鉄錆が付着して痕跡を残している。29～31は鉄釘である。29は頭部が残存している。30は小型でほぼ完存している可能性がある。頭部はつぶれ、先端は矩形に折れ曲がる。

32は明代の青花碗である。外面に花文を描き、内面には口縁端部及び内底面との境に圏線を配し、内底面にも文様を施す。33・34は土師器小皿である。外底面は糸切りを行なう。35は土師器坏で害底面ヘラ切りである。36は瓦質の茶釜である。肩部にスタンプ文を押捺する。鍔以下は外面刷毛目を施する。またこの部分には煤が付着している。37は紡錘形を呈する土錘である。ほぼ完形である。38は青銅製の錠前である。39・40は燻しを行なった丸瓦である。凹面は共に布目が残る。39の凸面は縦方向に暗文状の磨きが行なわれる。40の凸面はナデである。41は燻しのない丸瓦である。凸面は縦方向にヘラ状工具でナデを行い、凹面は布目の上からナデている。42～46は平瓦である。42～44は凹凸両面にナデを行なう。また44は燻しを行なっている。45は凹面布目、凸面縄目が残る。46は焼成須恵質で、凹面に布目が残り、凸面は斜格子目の上から粗いナデを行なう。

ＳＤ１１（第４図）

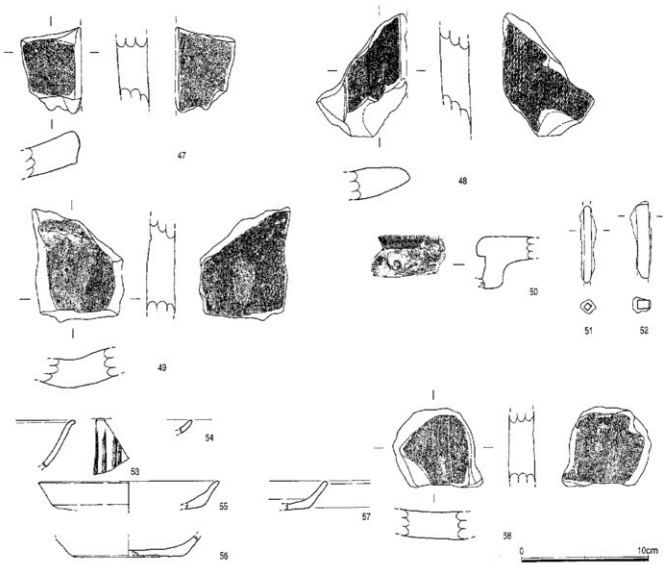
調査区南端部分で検出し、SK12に切られている。南側の立ち上がりは調査区外であるが、土層断面から復元すると幅4.5m、深さ１mを測り、断面逆台形を呈する。現状ではSD05より主軸方位がやや北に振れるようである。底部西側は東側に比べ20cm程高くなっている。遺物は陶磁器、土師器、瓦が少量出土している。遺物の取り上げは第４図9′～11層を上層、12～15層を下層として行なっている。位置的な関係からは第18次調査SD029との関連も考えられるが、方位・形状が異なっており関連は不明瞭である。遺物は少量であるため不確定ながら13世紀後半から14世紀前半代と考えられる。

出土遺物（第９図）　47～52は上層出土、53～58は下層出土である。47～49は平瓦である。47は凹凸両面ナデを行なう。48は凹面は側縁部に沿ってナデを行なうが、布目も残っている。凸面は縄目の叩き痕跡が残る。49は凹面に布目が残り、横方向に紐痕が観察できる。凸面は縄目の叩きの後にナデを行なっているが、一部に布目が付着している。50は唐草文を配した軒平瓦である。表面には燻しが行なわれる。51・52は鉄釘である。錆化が著しく形状は不明瞭である。

53は龍泉窯系青磁碗の口縁部である。端部は外反し、外面に縦のヘラ描き文様が認められる。54は青磁皿の小破片である。釉調は淡い緑色を呈する。55～57は土師器坏である。55は外底面ヘラ切り、他は糸切りである。58は燻しを行なう平瓦である。凹凸両面共にナデを行なう。

写真６　SD11（東から）

写真７　SD11土層



第９図　SD11出土遺物実測図（1/3）

２）土坑（ＳＫ）

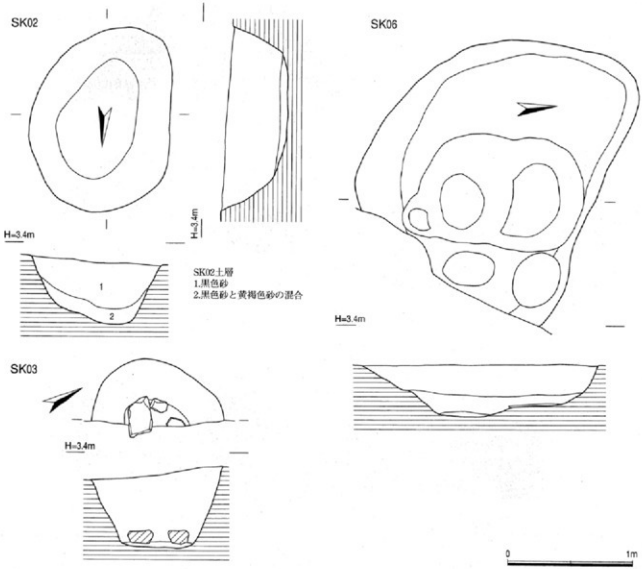
ＳＫ０２（第10図）

調査区北端で検出する。長軸1.5ｍ、短軸1.1ｍ、検出面からの深さ50cmを測る。底面は緩やかにくぼみ、壁の立ち上がりは比較的しっかりしている。出土遺物は少量で糸切りの土師器小皿小破片が出土する。

ＳＫ０３（第10図）

調査区北端で検出し、SD05を切る。東半分は調査区外であるが、上面径１ｍ強の円形を呈するものと考えられる。底面はほぼ平坦で、直上に自然礫、板碑頂部残欠を据え根石状にしている。壁はほぼ直立する。糸切り土師器小皿・坏、瓦が出土する。時期はSD05との切り合い関係から中世後半以降と考えられる。

出土遺物（第11図　59～63）　59・60は土師器小皿の小破片である。外底面は糸切りを行い、圧痕は認められない。61・62は平瓦である。61は凹凸両面ナデを行なう。62は凹面布目が残り、凸面はナデを行なう。63は砂岩製の板碑残欠である。頭部を三角形に作り２条の沈線を刻んで額部とする。



第10図　SK02・03・06実測図（1/30）

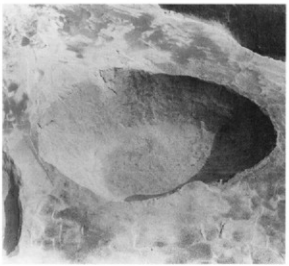
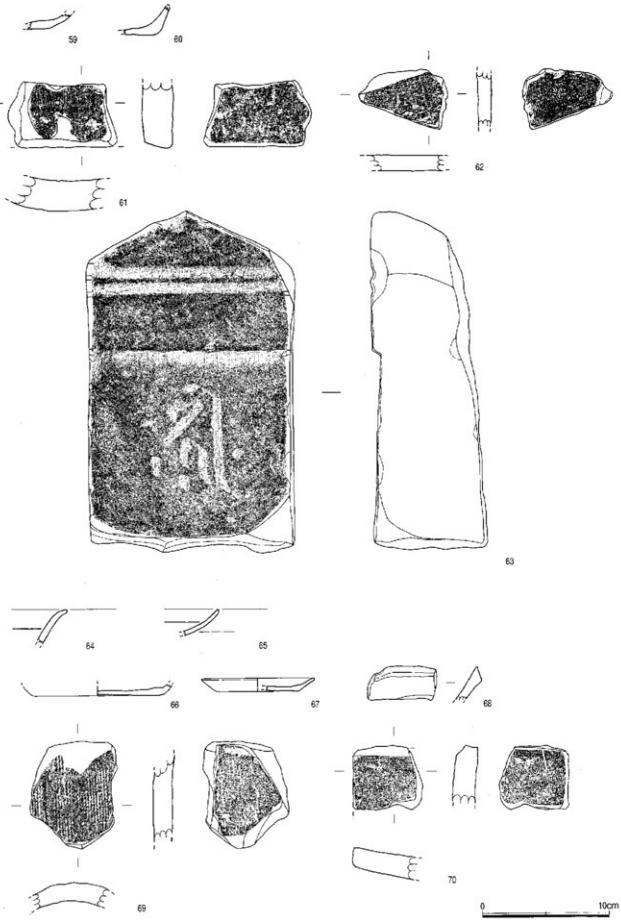
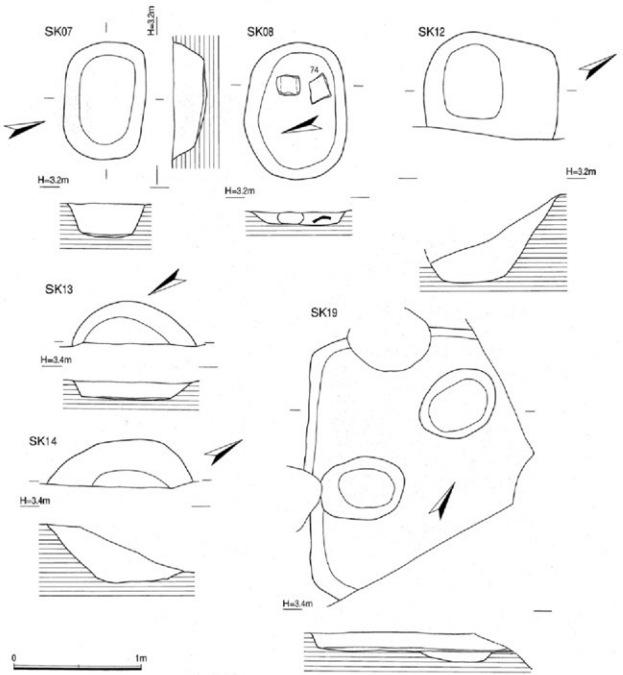


写真8　SK02（南西から）

写真9　SK03（西から）



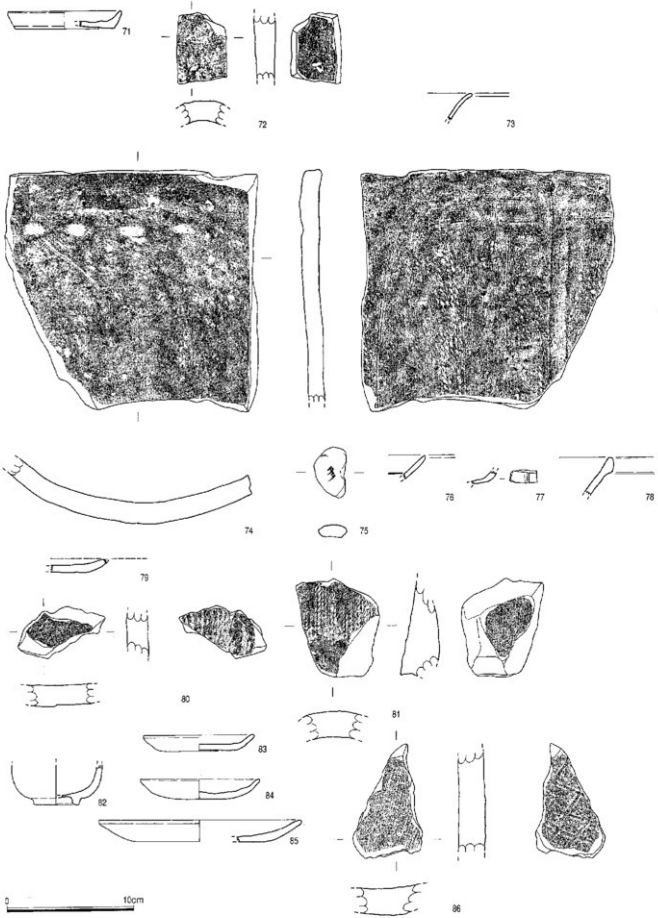
第11図　SK03・06出土遺物実測図（1/3）



第12図　SK07・08・12・13・14・19実測図（1/30）

写真10　SK06・07・08（西から）

写真11　SK07・08（西から）



第13図　SK07・08・12・13・14・19及びその他の出土遺物実測図（1/3）

塔身上部にはキリーク（阿弥陀如来）の種子が刻まれている。

ＳＫ０６（第10図）

調査区中央部分で検出する。長軸2.2ｍ以上、短軸1.8ｍの平面不整な長方形を呈する。壁は深さ20～35㎝を測り、立ち上がりは明瞭である。床面は平坦であるが中央部分にピット上の掘り込みを有する。平面的には土坑に伴なうものか、切り合いを有するものかは明らかでない。遺物量は比較的多くコンテナ１箱分出土する。陶磁器小破片、土師器、鉄釘が出土する。中世前半代に位置付けられる。

出土遺物（第11図　64～70）　64は白磁碗の小破片である。65は白磁皿で、内底面に段を有する。いずれも釉調はやや黄味を帯びる。66は土師器坏、67は小皿である。いずれも外底面は糸切りで板状圧痕を有する。68は須恵器の片口鉢である。口縁端部は拡張なく三角形に仕上げられる。69・70は焼成土師質の瓦である。69は丸瓦であろうか。凸面縄目叩き、凹面布目が残る。70は平瓦である。胎土に砂粒を多く含む。凹凸両面ナデによる。

ＳＫ０７（第12図）

調査区南側で検出する。長軸１ｍ、短軸0.65ｍ、深さ25㎝を測り、平面隅丸長方形を呈する。底面は中央部に向かって緩やかにくぼんでいる。遺物は少量で、糸切り土師器小皿、瓦、壁体破片が出土している。

出土遺物（第13図　71・72）　71は外底面糸切りの土師器皿である。72は胎土に砂粒を多く含む丸瓦である。凸面には布目が残っている。凹面はナデを行なう。

ＳＫ０８（第12図）

調査区南側で検出する。長軸1.1ｍ、短軸0.8ｍ、深さ10㎝を測り、平面隅丸長方形を呈する浅い土坑である。底面直上に平瓦１点、熱を受けた花崗岩を据えている。遺物は少量で、白磁１点、糸切り土師器小皿、瓦が出土している。

出土遺物（第13図　73・74）　73は白磁小破片である。胎土は白色で精良である。74は須恵質の平瓦である。凹面は布目の上からナデを行い、凸面は布目の叩きの後ナデを行なう。

ＳＫ１２（第12図）

調査区南端で検出し、SD11を切る。東側の一部を調査区外に延ばすが、平面１ｍ程度の方形を呈するものと考えられる。土層図からは深さ90㎝で底面がほぼ平坦な形状が確認できる。出土遺物には糸切り土師器小皿破片、一字一石経がある。18次調査SK415からも同じ遺物が出土しており、12世紀中頃に位置付けられているが、本遺構は切り合い関係から14世紀前半以降に位置付けられる。

出土遺物（第13図　75）　75は川原石に「多」字を墨書している。

ＳＫ１３（第12図）

調査区中央で検出する。検出面からの深さは15㎝を測り、埋土は褐色砂である。出土遺物は少量で青磁破片１点と土師器が出土する。

出土遺物（第13図　76）　76は青磁小破片である。内面に１条の沈線がわずかに残る。

ＳＫ１４（第12図）

調査区北よりで検出する。切り合い関係からSK19→SK14→SD05の関係となる。検出面からの深さは40㎝を測り、埋土は黒褐色砂である。出土遺物は少量で青磁破片１点と土師器が出土する。

出土遺物（第13図　77）　77は白磁合子であろうか。外面に櫛描き文が施される。

ＳＫ１９（第12図）

調査区北よりで検出する。全体の形状は不明瞭であるが、一辺１ｍ強の方形を呈するものと考えられる。埋土は淡黒色砂で、検出面からの深さは10㎝であるが壁はしっかりしている。底面はほぼ平坦

で埋土除去後に同じ埋土のピットを２基検出している。白磁破片と糸切り土師器坏・小皿が出土する。12世紀代に位置付けられようか。

出土遺物（第13図　78）　78は口縁端部を玉縁に仕上げる白磁碗の口縁部破片である。

３）その他の遺物（第13図　79～86）

79～81は38層出土遺物である。前述の通りほとんどの遺構が38層上面から掘り込まれている。今回の出土遺物からはこの層の形成時期等は不明である。79はヘラ切りの土師器皿である。80は燻しを行なう平瓦である。凹面布目の後ナデ、凸面縄目の叩きを行なう。81は玉縁式丸瓦の破片である。玉縁部分は欠失する。燻しを行い、凹面布目、凸面縄目の叩きが残る。

82～86は遺構検出時の出土遺物である。82は青白磁の碗である。高台畳付きのみが露胎となる。83～85は外底面ヘラ切りを行なう土師器坏・皿である。83・84には板状圧痕が残る。86は須恵質の平瓦である。凹面布目、凸面斜格子目の叩き痕跡が残る。

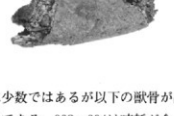
４）小　結

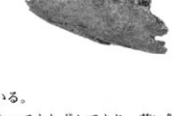
調査区が狭く遺構の時期・相互の関連については不明な点が多いが、今回の調査について簡単にまとめておきたい。出土遺物は土師器の坏・皿破片瓦が主体となり、陶磁器類は僅少であった。またSD05を主体として、瓦類の出土も見られた。土師器はヘラ切りを行なうものが一定量出土しているが、各遺構の所属時期はおおむね糸切りの土師器出土以降のものと考えられる。18次調査においてもこの傾向は認められるようで、集落の形成時期は12世紀台から、終焉は14世紀前半と考えられている。その後は宮崎宮域内に取り込まれた可能性が指摘されており、本調査においてもこの考察に添う結果が得られたといえよう。

付編　参考資料：箱崎19次出土動物遺存体（屋山）（福岡市埋蔵文化財調査報告書第664集、箱崎19次調査出土資料）

	地区	大分類	小分類	部位名	左右	部分１	成長度	切痕	火熱	備　考
001	103	哺乳類		寛骨	右	関節臼付近	済み	なし	不明	タヌキ・アナグマ程度の大きさ
002	103	哺乳類	シカ	下顎	左	M1・M2 部	永久歯	なし	不明	咬耗わずか
003	103	哺乳類	シカ	上顎歯？		M1 か M2	永久歯	なし	不明	咬耗全くなし
004	103	哺乳類	シカ	下顎		下顎のみ	不明	なし	なし	002と接合しないが幅・高さ同じ
005	01下	哺乳類	シカ	臼歯		歯冠のみ	咬耗進んでいる	不明	なし	

001


002

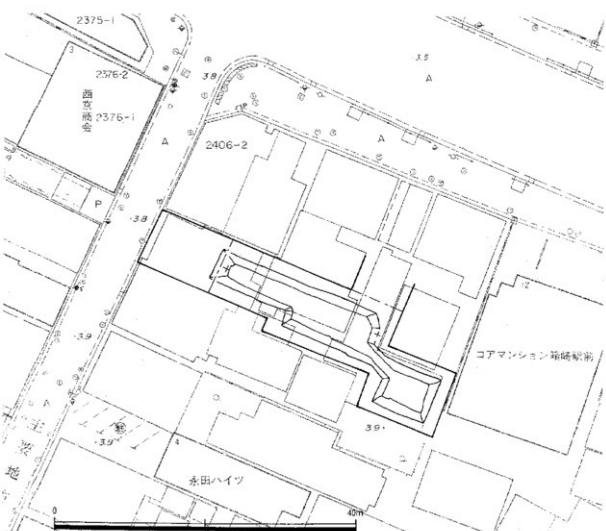


箱崎遺跡第19次調査では少数ではあるが以下の獣骨が出土している。

シカ　歯冠および下顎骨である。002～004は咬耗が全くないかあってもわずかであり、若い個体である。下顎骨にカットマークや被熱の痕跡はみられない。003は上顎歯の可能性があり、頭蓋骨ごと破棄された可能性がある。

005は咬耗が進んでおり歯冠高は10ミリを測る。

箱崎遺跡群第23次調査



第1図　調査区位置図（1/500）

Ⅰ はじめに

1　調査にいたる経過

平成12年4月10日付けで王丸彦一郎氏より福岡市教育委員会宛に福岡市東区箱崎3丁目2404番地の物件に関して自宅兼共同住宅建設にかかる埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号12-2-028）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡群（分布地図番号34-2639・遺跡略号HKZ）に含まれているところである。申請地は既設住宅のため試掘不可能であったが、東側隣接地を箱崎遺跡群第11次調査として発掘調査を行っており、それからの成果により申請地に遺構が存在するのは明らかであった。この状況を受けて埋蔵文化財課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取り扱いについて協議を行った。協議の結果共同住宅建設による遺構の破壊が避けられないため、発掘調査を行い記録保存を図ることで協議が成立した。

調査期間は平成12年9月22日～平成12年11月2日である（調査番号0041）。なお発掘調査は敷地面積381㎡のうち西側道路建設予定地を除外した304㎡を対象とした。調査面積は188㎡で、遺物はコンテナ13箱分出土している。

現地での発掘調査にあたっては王丸彦一郎様をはじめとして関係の皆様から発掘調査についてご理解を得るとともに多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

2　調査体制

事業主体　王丸彦一郎
調査主体　福岡市教育委員会埋蔵文化財課
調査総括　埋蔵文課財課長　　山崎純男
　　調査第2係長　　力武卓治
調査庶務　文化財整備課　　御手洗清
調査担当　調査第2係　長家伸

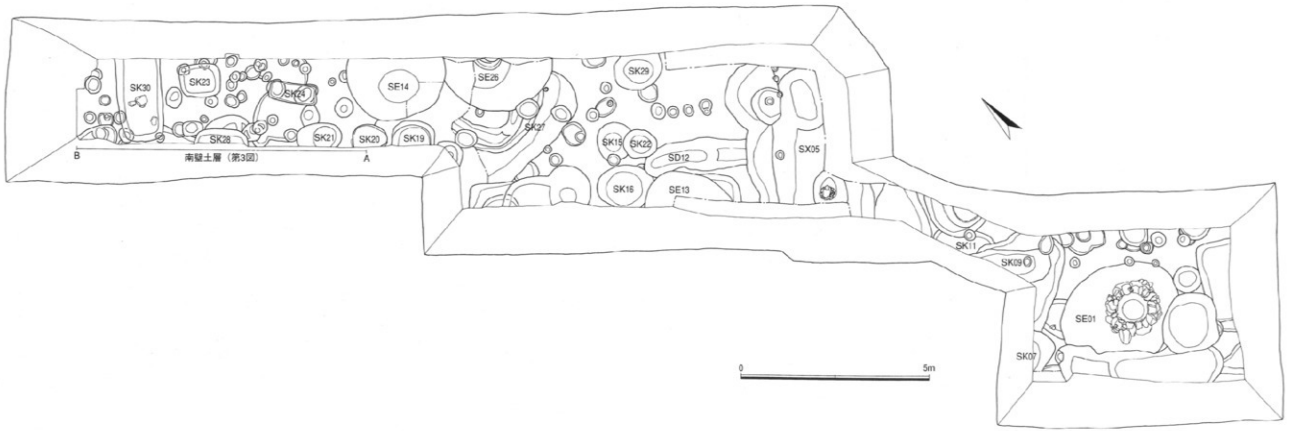
なお調査・整理作業に従事された方々にも、この場で厚くお礼申し上げたい。

Ⅱ 調査の記録

1　調査の経過

対象地は調査前には近世町屋が西側の通称大学通りに面して建っており、地権者のお話によると江戸時代末の建築と言われている。母屋は申請地の西半部分にあり、東半部分の建物は後の増築であるとのことである。調査は既存建物解体終了後に着手した。表土除去は重機で行なったが、申請地が狭長であるため当初東側半分の調査を行なった後、土砂を反転して西側部分の調査を行なっている。遺構検出は地山である黄褐色砂上面を行なった。地山標高は2.5～2.7mを測りわずかに東側が高くなるが、全体にはほぼ平坦に近い。

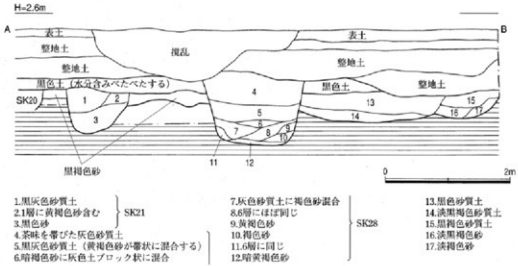
調査区内の基本層序は西半部分では現地表面から1mほどの盛土の下に20cm程の黒色土（やや水分を含みべたべたする）が堆積し、その下に淡黒褐色砂が10cm程認められる。地山はこの下位で検出されている。なお土層観察によると遺構は地山直上の淡黒褐色砂上面及び更に上層の黒色土上面から掘り込まれている。東半部分は盛土の下位に暗灰色の整地土が堆積し、その下が地山の黄褐色砂となっ



第２図　調査区全体図（1/100）

写真１　調査区東半全景（東から）

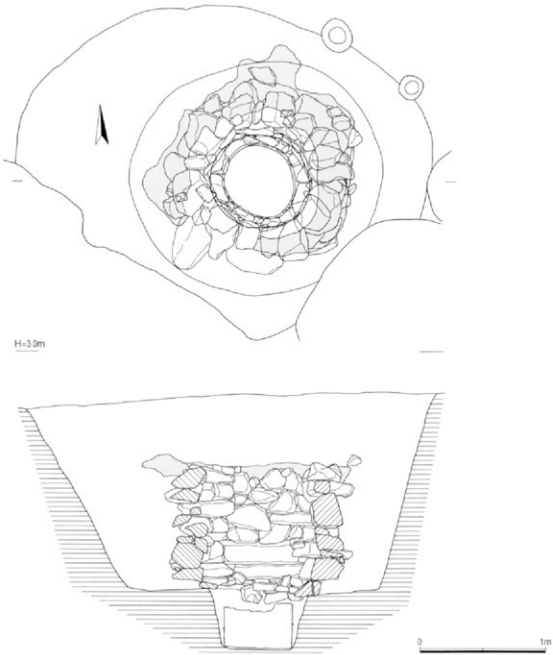
写真２　調査区西半全景（西から）



第３図　南壁土層図（1/60）

写真３　南壁土層

ている。検出遺構はいずれも中世前半以降に位置付けられる井戸、土坑、ピット等である。出土遺構のおおまかな傾向としては東半部分には近世以降の掘り込みが多く、母屋の存在していた西側半分では中世前半期の遺構が比較的良好な状況で残されていた。



第４図　SE01実測図（1/30）

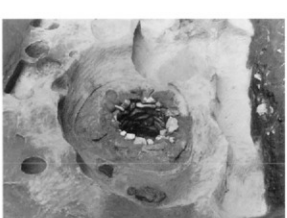
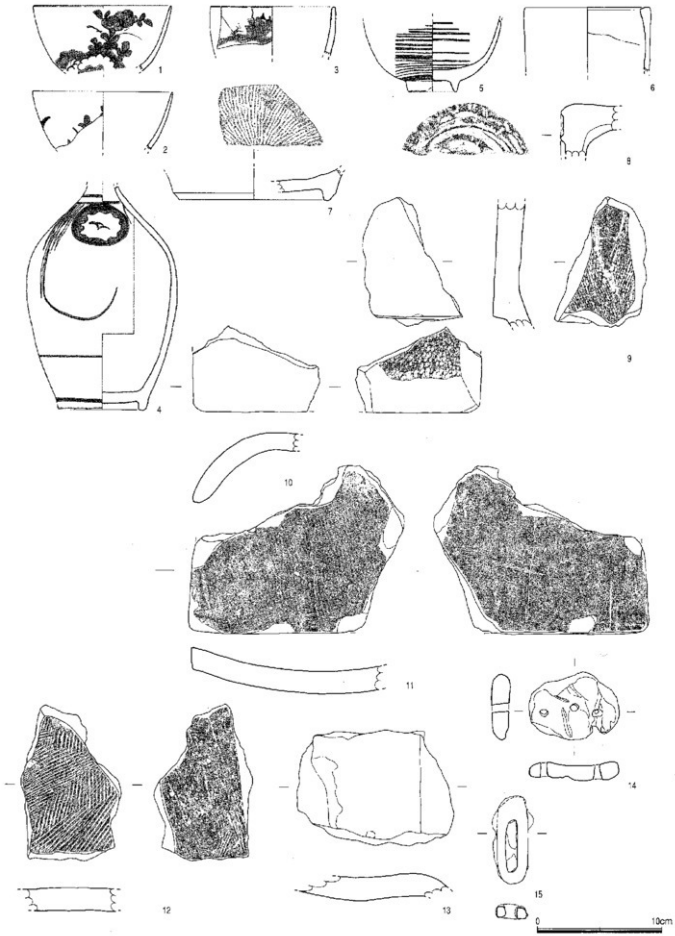
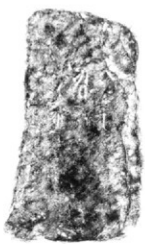


写真４　SE01（西から）

写真５　SE01石組み（西から）



第5図　SE01出土遺物実測図（1/3）



奉造立
（サ）（観世音菩薩）
屋□修妙霊位
キリーク
（阿弥陀如来）
（サク）（勢至菩薩）
應永六年八月
十五日

16

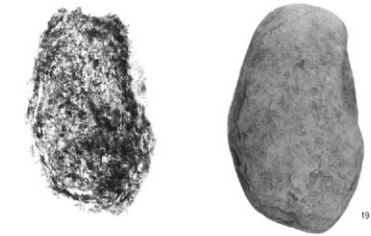
（カ）（地蔵菩薩）
キリーク
（阿弥陀如来）
（サ）（観世音菩薩）

17

（マン）（文殊菩薩）
バク
（釈迦如来）
（マン）（普賢菩薩）

18

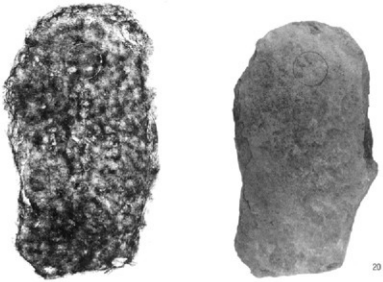
第6図　SE01出土板碑1（約1/10）



19

修。如。件。
迸 □ □ □

種子不明
明 念 □ 尼
応。
□ 永 二十年
九 月 廿八日



20

天正九稔

種子不明
前住 當山 □ 威。春 □ 猊。座元禅師
四 月 六 日

21

キリーク
（阿弥陀如来）
帰真觀衆禅門

第7図　SE01出土板碑2（約1/10）

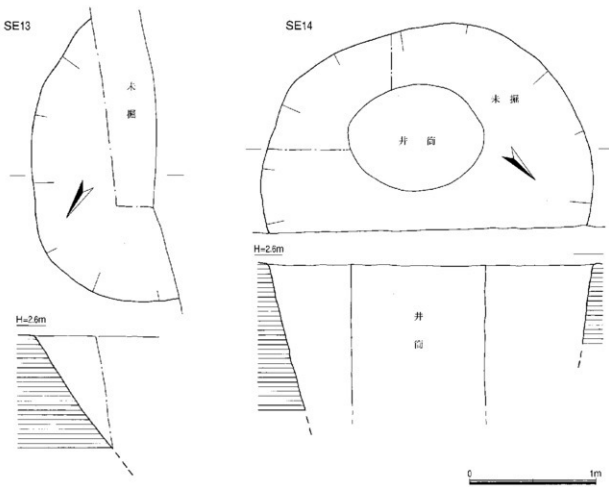
2　遺構と遺物

1）井戸（SE）

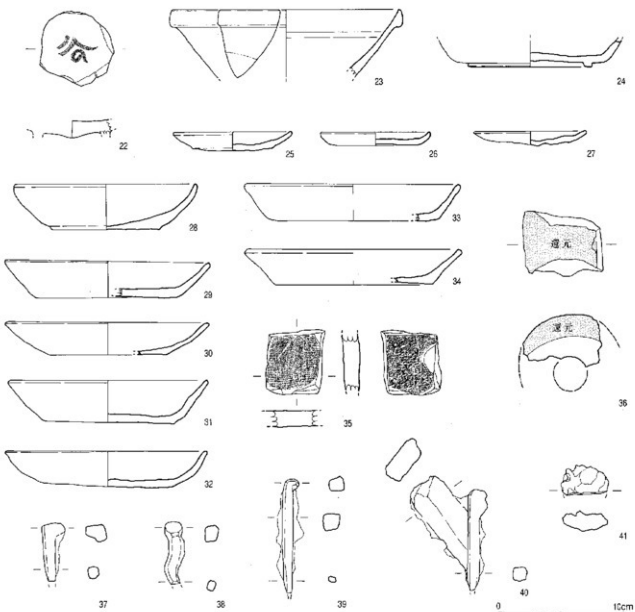
今回の調査では5基の井戸が確認できた。このうち近世後期以降に位置付けられるSE10（瓦組み井戸）を除く4基について記述する。なおSE10については地権者の方によれば戦前まで使用されていたとのことである。

ＳＥ０１（第4図）　調査区東側で検出する。掘り方平面で3.3×2.7ｍの楕円形を呈する石組みの井戸である。埋土は掘り方が暗褐色砂をブロック状に含む黄褐色砂で、井筒内は炭化物を含む褐色砂質土である。石組みは検出面から60㎝程掘下げたところから確認できるが、ここまでは埋土は褐色砂質土で平面的には井筒の痕跡は確認できなかった。石材は７～８段で内径80㎝に組上げられ、その最上段の石材上部には黄白色粘土がほぼ全面に貼り付けられている。井筒内部に石材の転落があまり認められないことから、石組みは本来の形状をとどめているものと考えられる。なおこの上部構造については不明であるが、板材の使用が行なわれたものと考えられる。石材は上部から５～６段は人頭大の自然石を用い、下位２段は長さ70㎝程の板碑などを転用した大型の石材を使用している。また石材の背面には白色粘土を充填している。最下位には径53㎝程の桶を水溜めとしている。桶の上部と大型石材の間には拳～人頭大の石材を粗く敷いている。出土遺物には陶磁器及び瓦類の他、石組みに使用された石材に板碑の転用品があり、紀年銘を有する資料も存在する。17世紀後半以降に位置付けられる。

出土遺物（第５～７図）　１～15は井筒出土である。１～４は染付である。５は茶褐色の地に白化粧土による刷毛目を施す。６は青磁香炉である。７は唐津焼の擂鉢である。９－13は瓦である。８は軒丸瓦である。瓦当外区には珠文、内区には巴文を配する。９～12は瓦である。９は玉縁式の丸瓦で



第８図　SE13・14実測図（1/30）

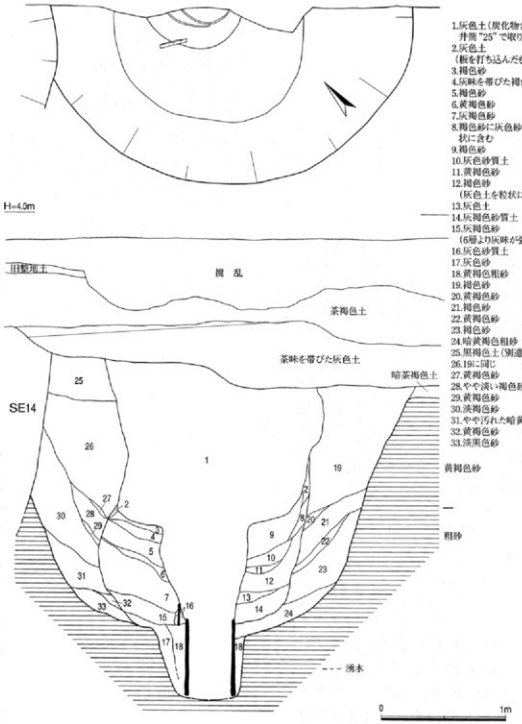


第９図　SE13出土遺物実測図（1/3）

凹面には布目が残る。10は凹面に布目が残る丸瓦。11は凹凸両面に板ナデ状の擦痕を有する。12は両面に刷毛目を有する。道具瓦であろうか。13は煙しを行なう桟瓦である。14は３箇所に穿孔を行なう滑石製品である。15は長円形の環状鉄製品である。止め金具であろうか。16～21は転用された自然石の板碑である。石質は16が凝灰岩ホルンフェルス、他は玄武岩である。紀年銘が残るものは16が応永６年（1399年）、20が天正９年（1581年）である。

ＳＥ１３（第８図）　調査区中央の南端で検出する。1/3程が確認できているが、径約2.4ｍ程の掘り方である。切り合い関係からSK16→SD12→SE13の関係となる。埋土は黒褐色砂質土で調査区内で井筒等は確認できなかったが、掘り方の状況から井戸の一部と考えられる。出土遺物は土師器のほか青磁・白磁小破片、獣骨があり、12世紀中頃～後半に位置付けられる。

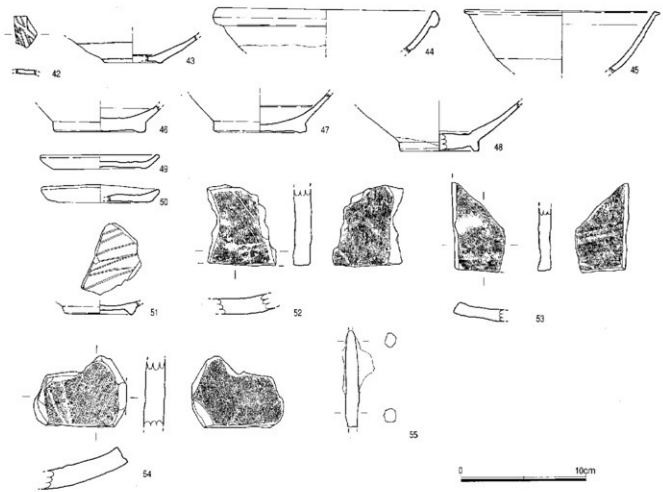
出土遺物（第９図）　22は龍泉窯系青磁Ⅳ類の碗である。外底面の釉を輪状にかきとる。内底に梵字に似た意匠の文様を施すが、内容は不明である。23は白磁Ⅳ類碗である。24は須恵器坏である。25～34は土師器皿・坏である。25が外底面ヘラ切りの他は糸切りによる。35は須恵質の平瓦である。凹



第10図　SE26実測図（1/30）

写真６　SE26（東から）

写真７　SE26土層

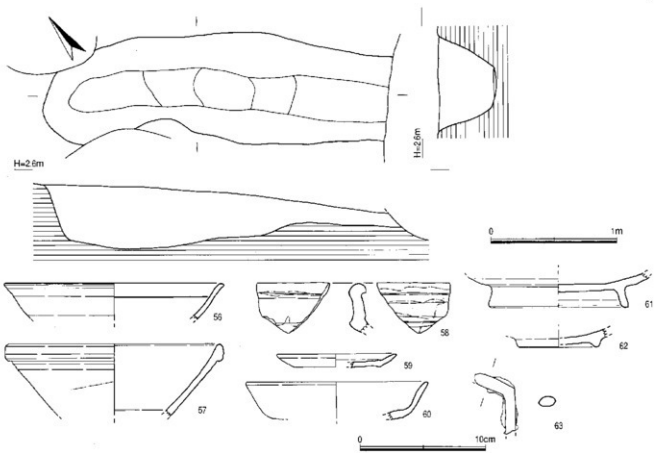


第11図　SE26出土遺物実測図（1/3）

面布目、凸面縄目が残る。36は羽口である。表面は還元し灰白色化する。復元孔径は2㎝強である。37～40は鉄製品である。いずれも錆化が著しい。37～39は釘で、40は釘と不明製品が錆着している。41は小型の椀形鍛冶滓破片である。表面茶褐色で、小突起が多い。

ＳＥ１４（第８図）　調査区中央東寄りで検出する。2/3程が確認できているが、径約2.6ｍ程度の円形の掘り方である。切り合い関係からSK27→SE26→SE14の関係となる。埋土は掘り方が黒色土のブロックを少量含む黄褐色砂で、井筒内埋土が黒褐色土である。検出部分の1/4を1.2ｍ程掘下げた時点で、雨天のため壁が崩落する兆候が見られたためこの後の掘下げを行なっていない。井筒の構造などは不明であるが、井筒を中途まで掘下げた段階では木質、瓦組みなどは検出できていない。出土遺物は燻し瓦、不明銅銭等が出土している。

ＳＥ２６（第10図）　調査区中央東寄りで検出する。2/3程が確認できているが、径約３ｍ程度の円形の掘り方である。切り合い関係からSK27→SE26→SE14の関係となる。井筒部分は1/3程を検出しているが、復元径50～70cmで桶組みである。桶の木質は最下段及び２段目の最下部が残存しているが、これによれば使用板材は長さ60cm、幅10cm、残存する厚み３㎝を測る。井筒は２段目を組み上げた後、周囲に土砂を互層上に充填し（１～17層）筒の固定を図り、その後掘り方全面を埋め戻したものと考えられる。埋土の連続状況から井筒土層が中ほどから径1.6ｍほどに広がっているのは、井筒



第12図　SD12及び出土遺物実測図（1/30、1/3）

部分が後世に何らかの事情で崩落した折に周囲に充填した埋土部分が同時に崩落した結果と考えられる。井筒の最下部は標高0.1mのレベルで、現況の湧水レベルは標高0.4mである。白磁を主体とした陶磁器、土師器、瓦器、瓦等が出土し、12世紀中頃に位置付けられる。

出土遺物（第11図）　42は青白磁皿の破片である。43は青磁小碗である。高台畳付きのみ露胎となる。外面に1条ヘラ描きの沈線が認められる。44～48は白磁Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ類である。49・50は土師器皿である。49は糸切り、50はヘラ切りによる。51は内底に暗文を有する瓦器碗である。52～54は須恵質の平瓦である。いずれも凸面はナデを行なうが、網目の叩き痕が残される。凹面は52・54に布目が認められる。55は鉄釘である。

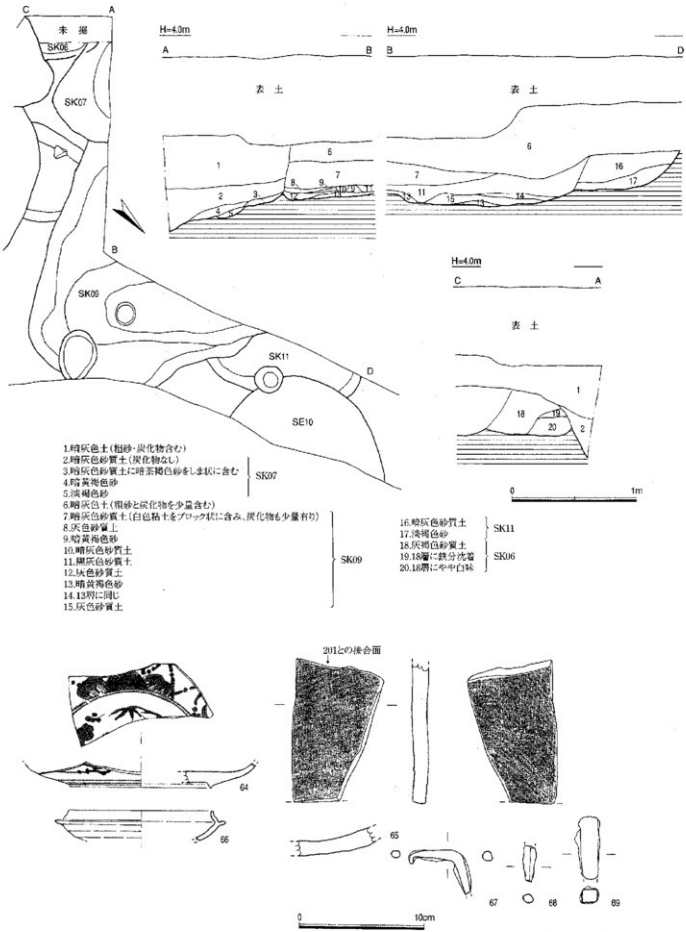
2）溝（SD）

ＳＤ１２（第12図）　調査区中央東寄りで検出する。SK16→SD12→SE13・SX05の関係となる。幅90cm、検出面からの深さ30～50cmを測る。西側は明瞭に立ち上がり東側はSX05に削平されている。埋土は褐色砂質土である。白磁、土師器、獣骨が出土し、12世紀中頃に位置付けられる。

出土遺物（第12図）　56・57は白磁碗である。58は陶器壺である。59・60は土師器皿・坏である。皿は糸切り、坏はヘラ切りである。61は土師器高台坏椀である。62は瓦器椀底部である。63は鉄釘である。「く」字状に折れ曲がる。

3）土坑（SK）

遺構の配置状況を見ると、SX05以東では近世に位置付けられる遺構が多く見られる。ここでは近



第13図　SK07・09・11及び09出土遺物実測図（1/30、1/3）

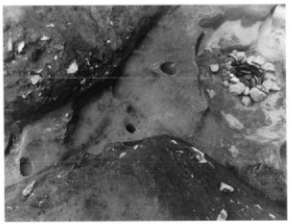


写真８　SK09（西から）

写真９　A－B－D土層

世以降に位置付けられるSK02～04、17等は除いている。

ＳＫ０７（第13図）　調査区東側で検出する。調査区のコーナー付近で検出したため掘り方の下端は不明で、全体を確認することができなかった。掘り込みの形状から井戸の掘り方の可能性も考えられる。出土遺物は少量で時期は不明であるが、近世遺物が出土するSK06を切ることから近世以降のものと考えられる。

ＳＫ０９（第13図）　調査区東側で検出する。平面不整形の竪穴である。SK11→SK10→SK07の関係となる。壁は検出面から20㎝程掘り込み、更に一段10㎝程の掘り込みを有する。出土遺物は検出面から10㎝までに集中しており、近世の遺物が出土している。

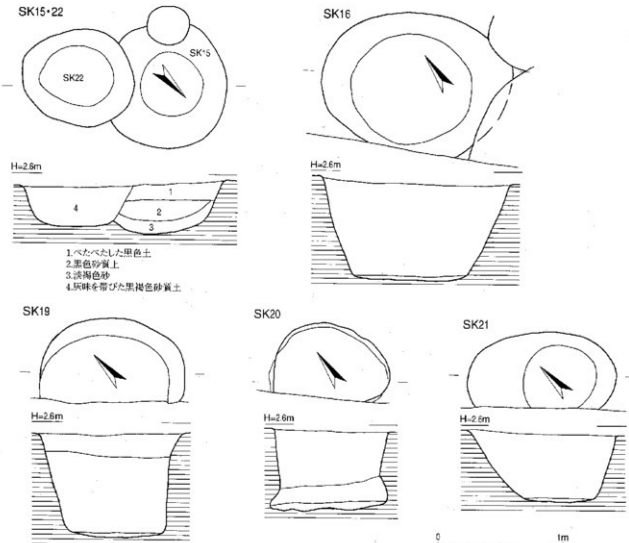
出土遺物（第13図）　64は染付の皿である。65は須恵質の瓦である。凹面布目、凸面縄目叩きの後粗いナデを施す。凹面全体に赤色顔料が塗布されているが、顔料の一部は破面にまで付着している。66は須恵器坏身で、小田編年Ⅳ期に位置付けられる資料である。混入品であるが該期の遺構が砂丘西側斜面まで広がる可能性を示す資料である。67・68・69は鉄釘である。67は鏨上に「コ」字状に折れ曲がる。

ＳＫ１１（第13図）　調査区東側で検出する。SK11→SK10→SK07の関係となる。平面形状は不明瞭であるが、径２ｍ程の円形～楕円形を呈するものと考えられる。壁は検出面から20㎝程掘り込み、床面はほぼ平坦となる。出土遺物は小破片のみで時期は不明である。

ＳＫ１５（第14図）　調査区中央で検出し、SK22に切られる。径１ｍの円形を呈し、検出面からの深さ45㎝を測る。埋土最上層は水分を多く含み非常に脆弱で水平に堆積し、この下は砂質土・砂がレンズ状に堆積する。遺物は土師器皿・坏が多く、その他白磁破片等が出土する。12世紀前半に位置付けられる。

出土遺物（第15図　70～90）　70・71は白磁である。70はⅢⅡ－１ｂ類である。口縁部断面は三角形につくり、体部下半まで施釉する。71はⅤ類碗である。内底面に段を有し、高台外面まで施釉する。72～86は土師器皿である。外底面の調整は72～75がヘラ切り、76～86が糸切りである。糸切りが主体となるものの今だヘラ切りが一定量混在しているといえよう。口径は９㎝を超える。87～90は土師器坏である。いずれも外底面糸切りで口径は15㎝を超える。87はSK27出土資料と接合する。

ＳＫ１６（第14図）　調査区中央で検出し、SD12とSE13に切られる。1.5×1.2ｍの長円形を呈し、検出面からの深さ80㎝を測り、底面は平坦である。埋土は上層から黒色砂質土、暗黄褐色砂、淡黒色砂がレンズ状に堆積する。出土遺物はSK15同様土師器皿・坏が多く出土し、陶磁器類は白磁主体と

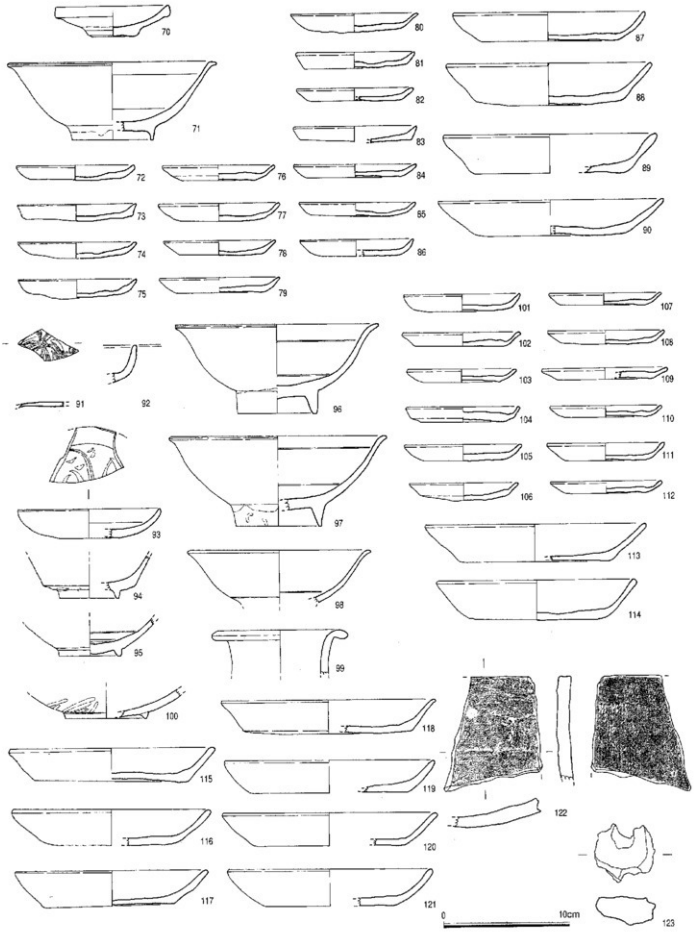


第14図　SK15・16・19・20・21・22実測図（1/30）

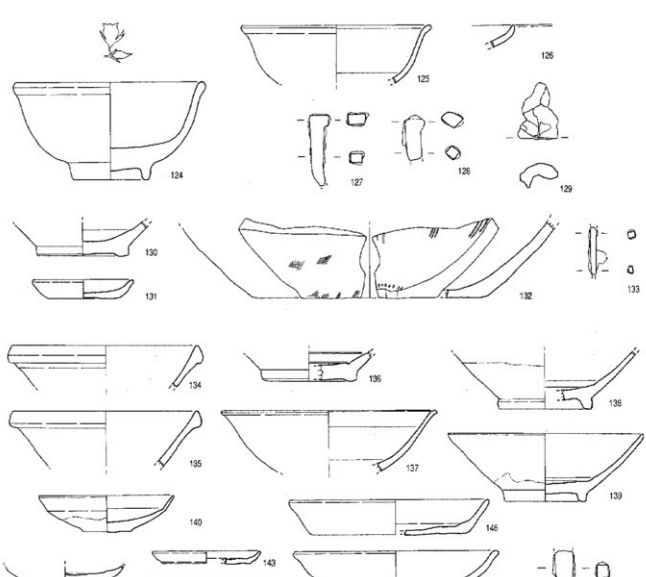
なる。SK15と遺構の状況は類似しているが、出土遺物では土師器の外底面が糸切りにほぼ限られる。混入と考えられるものもあるが陶磁器の組成からも時期的にやや新しい様相を伺うことができる。12世紀中頃に位置付けられる。

出土遺物（第15図　91～123）　91は青白磁の皿である。内底に花文を施す。92は青磁小碗である。釉調はくすんだ緑色を呈する。93～99は白磁である。外底面の釉は削り取られる。内底面に片彫りの草花文が施される。94は体部の屈曲が大きい碗である。高台畳付きのみ露胎となる。95は内底面の釉を輪状にかきとる。96～98はV類の碗である。99は壺の口縁部である。100は瓦器椀である。101～112は土師器皿である。外底面はいずれも糸切りによる。口径は9㎝前後である。113～121は土師器坏である。外底面はすべて糸切りである。口径は15～17㎝とばらつきがある。122は須恵質の平瓦である。凹面は布目、凸面は縄目の叩きの後ナデを行なう。123は椀形鍛冶滓である。鍛造剥片は認められない。

ＳＫ１９（第14図）　調査区中央西寄りで検出し、南側を調査区外に延ばす。現状で東西幅1.15m、南北長0.7m、検出面からの深さ85㎝を測る。壁は直立に近く、底面は平坦である。埋土は上層が暗



第15図　SK15・16出土遺物実測図（1/3）



第16図　SK19・20・21・22出土遺物実測図（1/3）

灰色砂質土、下層が黒褐色砂質土である。14世紀～15世紀の前半に位置付けられる。

出土遺物（第16図　124～129）　124は龍泉窯系青磁碗である。器壁は厚手で高台内側外底面のみが露胎となる。内面にスタンプ文を残す。125は白磁碗である。釉調は灰味が強い。126は朝鮮陶器の皿である。白化粧土が粗雑に施される。127・128は鉄釘である。129は鍛冶滓であろうか。表面暗紫色を呈し、破面には径5㎜以下の気孔が多い。下部には砂鉄が焼結している。

ＳＫ２０（第14図）　調査区中央西寄りで検出する。一部を調査区外に延ばすが、平面は径１ｍ前後の円形を呈するものと考えられる。検出面からの深さ60㎝を測り、壁は底部付近が抉れ断面袋状と

なる。底面には凹凸が認められる。埋土は黒褐色砂質土と黄褐色砂が互層状となる。遺物は小破片のみで、詳細は不明であるが12世紀中頃以降に位置付けられる。

出土遺物（第16図　130～133）　130はⅣ類白磁碗である。131は糸切りの土師皿である。132は土師質の擂鉢である。133は錆化が著しいが鉄釘であろう。

ＳＫ２１（第14図）　調査区中央西寄りで検出する。一部を調査区外に延ばすが、平面は1.2×0.8ｍ前後の長円形を呈するものと考えられる。検出面からの深さ50㎝を測る。埋土は上層が黒灰色砂質土、下層が黒色砂である。出土遺物のうち陶磁器は白磁主体で青磁は僅少である。また土師器の調整は糸切り主体でヘラ切りが混在する。12世紀前半～中頃に位置付けられる。

出土遺物（第16図　134～149）　134～139は白磁碗である。138・139は内底の釉を輪状にかきとる。140は白磁皿である。釉調は黄味の強い白色を呈する。141～148は土師器皿・坏である。145～148は外底面ヘラきりで、他は糸切りである。149は鉄釘である。

ＳＫ２２（第14図）　調査区中央で検出し、SK15を切る。平面は径90㎝の円形を呈し、検出面からの深さ30㎝を測る。埋土上面はSK15同様に水分を含み脆弱である。出土遺物は少量で土師器が大半で、陶器破片１点の他は磁器の出土はない。SK15に近接した時期であろうか。

出土遺物（第16図　150）　土師器坏である。外底面糸切りを行い板状圧痕を残す。

ＳＫ２３（第17図）　調査区西側で検出する。平面は長軸1.05ｍ、短軸0.9ｍの均整の取れた隅丸方形を呈する。検出面からの深さ25㎝を測り、断面浅皿状をなす。底面はほぼ平坦である。埋土はやや粘性を帯びた黒色砂質土である。13世紀中頃～14世紀初頭に位置付けられる。SK24との埋土の類似性などから埋葬遺構の可能性も考えておきたい。

出土遺物（第18図　151～157）　151は口ハゲの白磁皿である。152～155は土師器皿・坏である。外底面は糸切りで、153には板状圧痕が認められない。156は鉄釘である。157はやや湾曲した板状の鉄製品である。図上裏面に打ち込み様の突起が残っており、飾り金具の一種かと思われる。

ＳＫ２４（第17図）　調査区西側で検出する。長軸1.25ｍ、短軸0.5ｍを測り、平面長方形を呈する。検出面からの深さ10～15㎝を測り、壁は直立する。埋土はSK23同様やや粘性を帯びた黒色砂質土である。検出面直上で大臼歯の一部が出土する。また糸切りの土師器皿、瓦器小破片が出土するのみで時期は不詳であるが、中世前半代に位置付けられよう。出土遺物や比較的均整の取れた掘り方から、埋葬遺構の可能性も考えられる。

ＳＫ２７（第17図）　調査区中央部分で検出する。周囲の遺構との切り合い関係から最も先行する遺構と考えられる。崩落の危険があり全体の1/3程度を完掘したのみで、不明な点も多い。平面は南

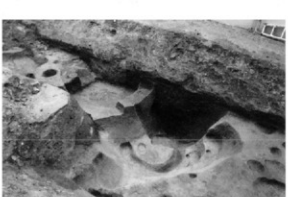


写真10　SK27（南から）

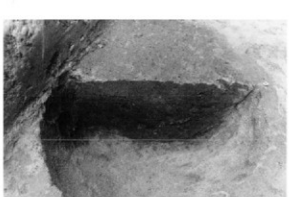
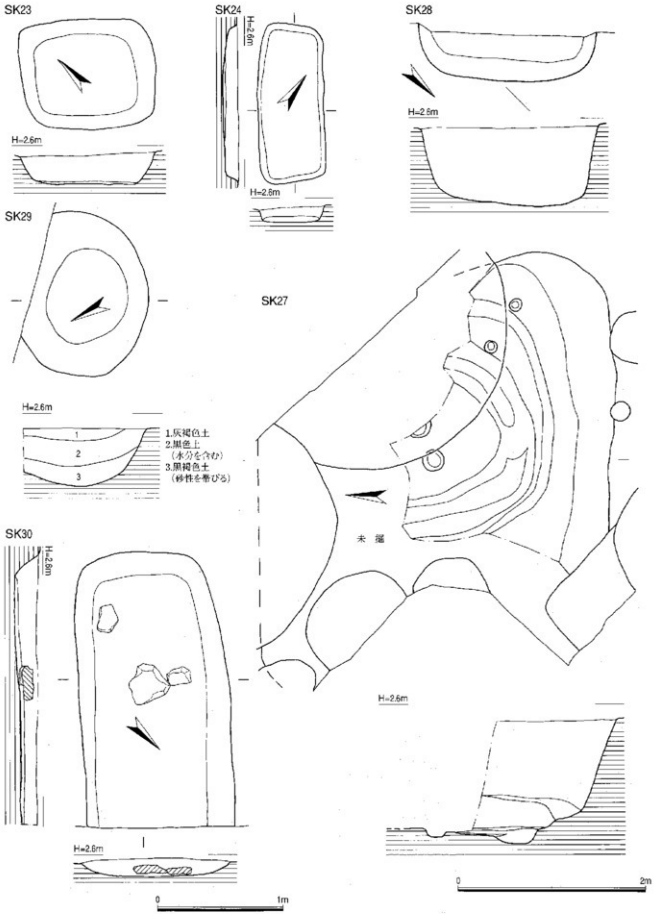
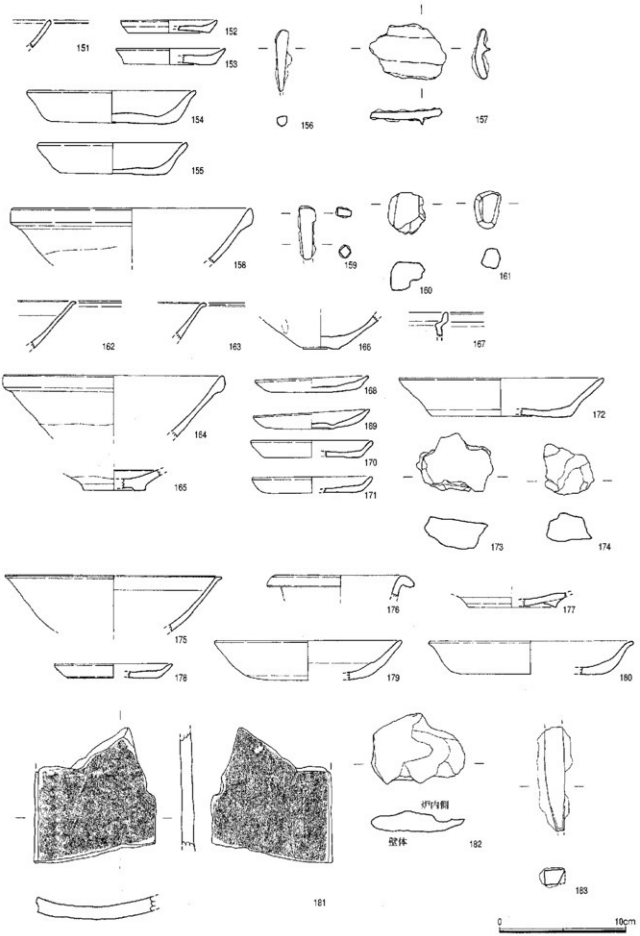


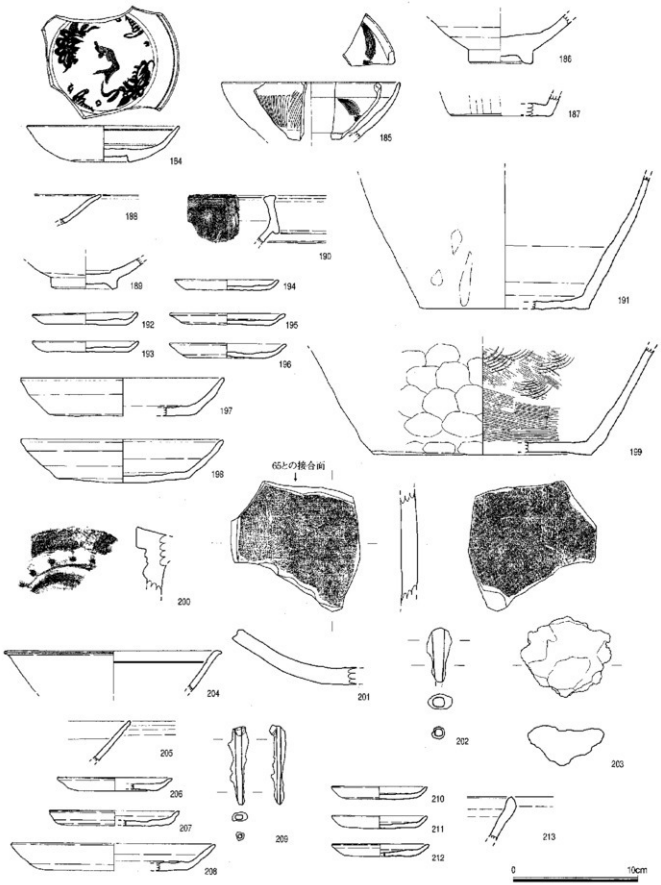
写真11　SK29土層



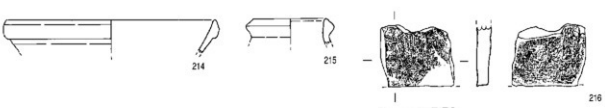
第17図　SK23・24・27・28・29・30実測図（1/40、1/30）



第18図　SK23・27出土遺物実測図（1/3）



第19図　SK28・29出土遺物実測図（1/3）



第20図　SK30出土遺物実測図（1/3）

北長3.7ｍ、東西長５ｍ弱の隅丸長方形に近い形が復元できる。底面は検出面から1.2ｍ程で、２段に掘下げられている。底面は外周を巡るように幅40～50㎝の溝が掘り込まれる。溝の深さは西側で15㎝、南側で40㎝を測る。底面はほぼ平坦であり、深さ10㎝のピット状の掘り込みが確認できる。埋土は黒褐色土粒を含む淡黒色砂である。出土遺物の内陶磁器類は白磁が大半を占め、土師器は糸切りとヘラ切りが混在する。第15図87はSK15との接合資料である。12世紀前半に位置付けられる。

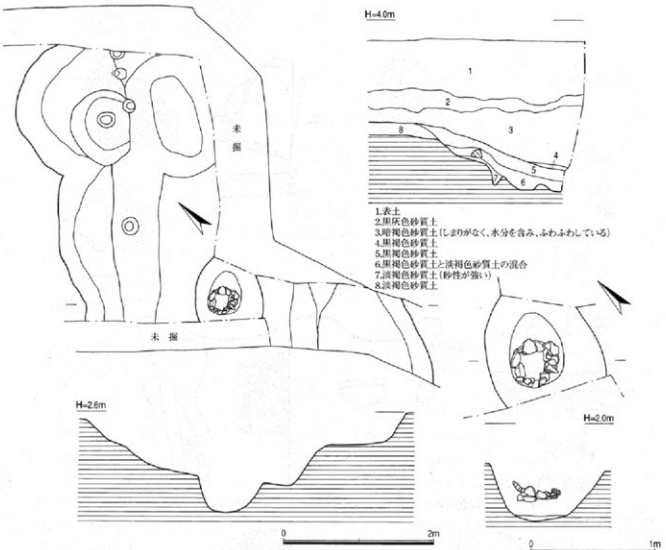
出土遺物（第18図　158～183）　158～161は上面出土、164～174は検出面から80㎝程の１段目迄の出土資料、175～183は掘り方全体から出土したものである。158はⅣ類の白磁碗。159は鉄釘である。160は鉄滓である。鍛冶滓であろうか。鋳物滓の可能性も考えられる。161は鉄滓もしくは錆化の著しい鉄釘か。破面なく表面の観察のみでは詳細不明である。162～165は白磁碗である。166・167は中国陶器である。166は小碗、167は壺の口縁部である。168～172は土師器皿・坏である。168・169は外底面ヘラ切り、他は糸切りである。173・174は鋳物関連の滓であろうか。175・176は白磁である。177は瓦器碗底部である。178～180は土師器皿・坏である。坏はヘラ切りである。181は須恵質の平瓦である。凹面は布目、凸面は縄目の叩きを行なうが両面とも比較的丁寧にナデを行なう。182は壁体破片である。砂粒を多く含み還元している。内面には滓が付着し茶褐色を呈する。183は鉄釘であろうか。鑿等の工具の可能性も考えられる。

ＳＫ２８（第17図）　調査区西側で検出する。遺構の大半を調査区外に延ばすため、形状については不明瞭である。平面は比較的均整の取れた隅丸方形状を呈し、幅1.4ｍ、検出面からの深さ70㎝を測る。掘り方壁は直立に近く、底面は平坦である。第３図土層から遺構面上面を覆う黒色土上面から掘り込んであり、時期的には新しい段階のものであろう。15世紀後半以降に位置付けられる。

出土遺物（第19図　184～187）　184は碁笥底の明代染付皿である。畳付きのみ釉をかきとる。内底圏線内に草花文、中央に赤褐色に彩色された魚文を配する。185は同安窯系青磁碗である。186は白磁碗底部である。187は小型の滑石製容器である。

ＳＫ２９（第17図）　調査区中央で検出する。一部を調査区外に延ばすが平面は1.3×1.1ｍの長円形を呈し、検出面からの深さ60㎝を測る。埋土２層は水分を含んで脆弱な黒色土である。埋土中から多くの土師器が出土している。形状・埋土・遺物の出土状況などSK16との類似点が多く関連を有する可能性が考えられる。出土遺物は土師器を主体とし、陶磁器類他を若干含む。13世紀後半～14世紀初頭に位置付けられる。

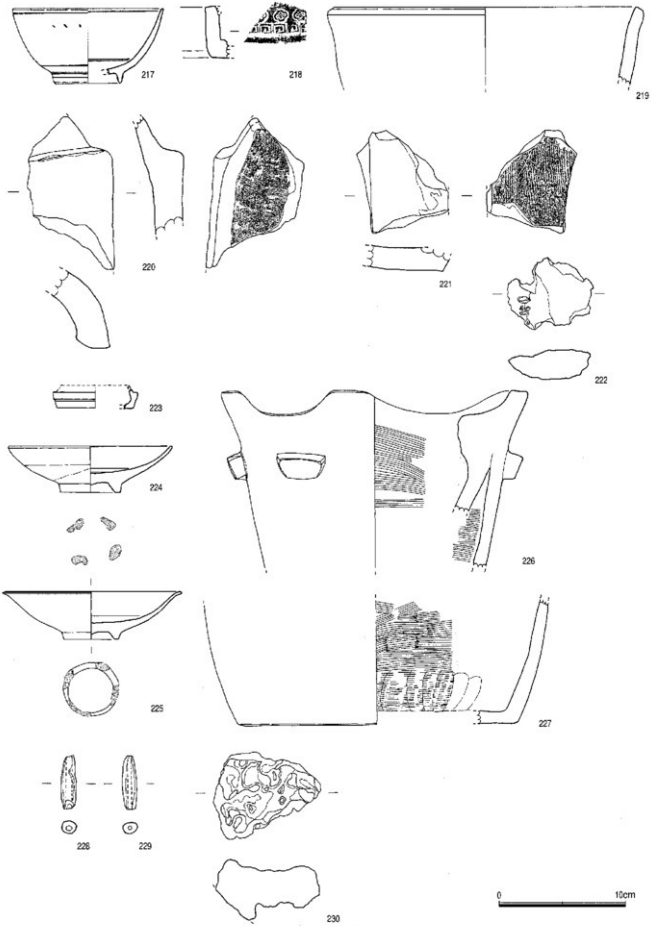
出土遺物（第19図　188～213）　188～203は埋土全体からの出上、204～209は１層出土、210～212は２層出土、213は３層出土である。188は口ハゲの白磁である。189は白磁底部である。190・191は陶器である。192～198は土師器坏・皿である。いずれも糸切りによる。199は土師質の甕である。200は巴文を有する軒丸瓦である。201は平瓦でSK09出土65との接合が確認できた。接合面以外の凹凸面・破面に赤色顔料が塗布されている。202は鉄釘であろう。203は楕形鍛冶滓である。204・205は白磁



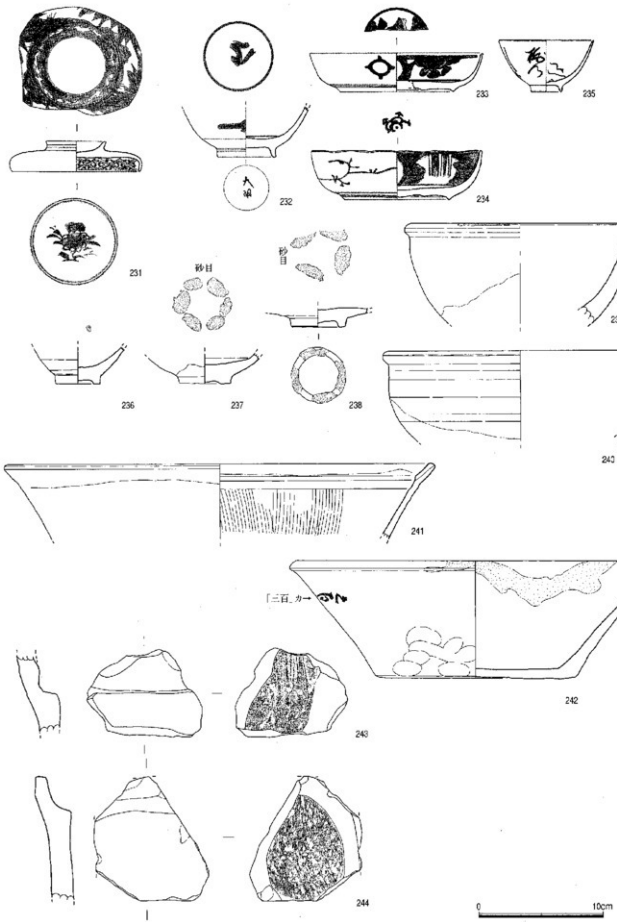
第21図　SX05実測図（1/50、1/30）

写真12　SX05（北から）

写真13　SX05内石組み（北から）



第22図　SX05出土遺物実測図1（1/3）



第23図　SX05出土遺物実測図２（1/3）

碗である。206～208は糸切りを行なう土師器皿・坏である。209は頭部の折れ曲がった鉄釘である。210～212は糸切りの土師器皿である。213は須恵質の鉢口縁部破片である。

ＳＫ３０（第17図）　調査区西端で検出する。北側を調査区外に延ばすが、長軸2.2ｍ以上、短軸1.2ｍの均整の取れた隅丸長方形を呈する。検出面からの深さ20㎝を測り、底面はほぼ平坦である。床面ほぼ直上で板状の石材を３個確認したが、配列状態などは不明である。埋土は暗灰色砂質土である。出土遺物は白磁、青磁、陶器、土師器の小破片のみである。13世紀代か。

出土遺物（第20図）　214はⅣ類白磁碗である。215は褐釉の瓶である。216は須恵質の平瓦である。凹面布目、凸面縄目の後両面ともナデを行なっている。

４）不明遺構（SX）

ＳＸ０５（第21図）　調査区中央で検出する。幅５ｍ程の不整な溝状を呈する。底部は平坦で北側が20cmほど深くなっている。埋土は黒褐色砂が主体となる。底面南側には径１ｍ程の略円形の掘り込みに、拳大の自然石・土器破片を２～３段に粗く組上げている。掘り方埋土は暗褐色土ブロックを含んだ暗黄褐色砂、右組内は褐色砂である。時期的には近世の遺構と考えられる。SX05の機能は不明であるが、この上面埋め立て土（５層）が、水分を多く含みしまりのない砂質土であることなどから、池状の遺構の可能性も考えたが、今後の箱崎遺跡群内での類例を待ちたい。

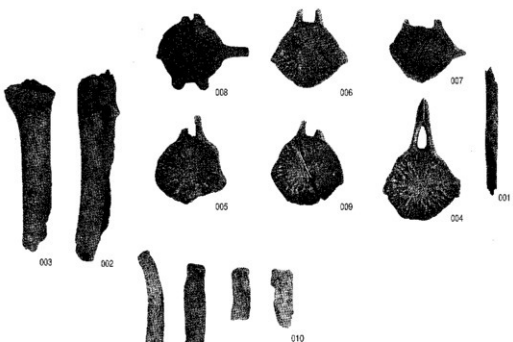
出土遺物（第22・23図）　217～222は８～10層（SX05埋土）、223～230は５層部分を含めて取り上げた遺物、231～244は５層（SX05埋没後の盛土：第３図黒色土・第13図６層に対応する遺構面直上の盛土）出土である。217は染付碗である。218は外面にスタンプ文を施す瓦質の鉢である。219は土師質の鍋であろうか。220・221は燻しを行なう瓦。221は底面石組内から出土する。222は楕形滓である。223は青白磁の合子身。224は全面に施釉され砂目が残る。225は内底の釉を輪状にかきとる。226・227は土師質の火舎である。228・229は土錘である。230は楕形滓である。流動性が高い。

231～235は磁器、236～241は陶器、242は土師質土器、243・244は丸瓦である。これらの遺物から５層の形成は近世中頃以降であると考えられる。

５）小　結

今回の調査で中世前半～近世の遺構・遺物を確認した。簡単に遺構の変遷をたどりたい。本調査区で遺構が確認できるのは12世紀前半からである。遺物としては磁器類は白磁にほぼ限られ、土師器は糸切りが多いが、ヘラ切りも一定量を占めている。この後中頃にかけて遺構・遺物が増加する。この後13世紀前半～中頃の青磁が優勢となる時期の遺構は認められないが、13世紀後半～14世紀にかけて再び遺構が確認できるようになる。隣接する６次調査では12世紀後半～13世紀前半の遺構がまとまって確認されており、今後の調査事例の増加により、中世前半の変遷が追えるようになると考えられる。また近世に位置付けられる遺構としてはSE01、SX05を確認しているが、箱崎遺跡群内の近世町屋の展開を考えるとより多くの遺構が存在したものと考えられる。今回の調査では18世紀以降の盛土を除去した後に遺構確認を行なっており、この時点で失われた遺構・遺物も多いものと考えられる。今回の調査地点は砂丘の北端部に近く、特に中世以降の生活面の広がりについては今後の検討課題を提示したといえよう。

	地区	層位	大分類	小分類	部位名	左右	部分1	部分2	成長度	切痕	火熱	備　考
001	13西半		鳥類	サギ類	尺骨		基幹部のみ		不明	なし	なし	中型～大型
002	12西半		哺乳類	シカ	尺竹	右	近位部	近位端欠損	成獣	あり	なし	イヌの咬痕あり
003	12西半		哺乳類	シカ	橈骨	右	近位部		成獣	あり	なし	イヌの咬痕あり
004	05	5層	哺乳類	イルカ	椎骨		椎体のみ		椎頭未骨化	あり	なし	横突起切断
005	05	5層	哺乳類	イルカ	椎骨		椎体のみ		椎頭未骨化	あり	なし	横突起切断
006	05	5層	哺乳類	イルカ	椎骨		椎体のみ		椎頭未骨化	あり	なし	右横突起切断
007	05	5層	哺乳類	イルカ	椎骨		椎体のみ		椎頭未骨化	あり	なし	棘突起・横突起切断
008	05	5層	哺乳類	イルカ	椎骨		椎体のみ		椎頭未骨化	あり	なし	棘突起切断
009	05	5層	哺乳類	イルカ	椎骨		椎体のみ		椎頭未骨化	あり	なし	右横突起切断
010	05	5層	哺乳類	イルカ	肋骨	不明	近位側		不明	一部あり	なし	3点
011	24		哺乳類	ヒト	大臼歯		歯冠の一部片			なし	なし	極小片



鳥類　13の西半から尺骨基幹部が出土した。中～大型のサギ類である。

哺乳類

シカ　12西半から出土の尺骨と橈骨の近位部は同一個体のもので、橈骨近位端に前方から刃物で斬りつけ上腕骨から切り離している。その後連結したまま破棄されている。近遠両端にイヌの咬痕あり。

イルカ　椎骨6点と肋骨の小片が出土している。椎骨はいずれも椎頸・窩部の関節面が分離している。6個中5個はほぼ径が同じで連結していた可能性がある。残りひとつは径が小さい。椎骨5個を連結させると厚さは約9㎝前後になる。

ヒト　24出土の歯はヒト大臼歯の破片である。歯冠の一部のみ遺存している。

小結　サギ類・イルカ類とも比較的近くで採集できるものである。特にイルカは近世でも博多湾内での捕獲が多く記録されており、箱崎遺跡内や同じく博多湾に面する博多遺跡群でも多く出土する。出土部位は椎骨がほとんどで頭蓋骨は少数である。椎骨は棘突起と横突起が切断されたものが多いため、海岸で胴部をぶつ切りにし、消費地には椎骨と肋骨周りの肉をブロックで持ち込むことが多かったのであろうか。シカの橈骨・尺骨は肉がほとんど取れず最初に廃棄する部分であるため、調査地点で解体作業を行ったと考えられる。

24は墓であるか、もしくは墓からの紛れ込みか。

箱　崎　12

－箱崎遺跡群第17次・第23次調査報告－

2002年（平成14年）３月29日

発　行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神１丁目８番１号

印　刷　福岡印刷株式会社

福岡市博多区東那珂１丁目10番15号